

# Actions, intentions, and self-assessment: The road to self-enhancement is paved with good intentions

Kruger, J. & Gilovich, T. (2004)  
PSPB, 30(3), 328-339.

**Keyword:** 意図(intentions); 自己高揚(self-enhancement);  
平均点以上効果(above-average effect); バイアス(bias);  
行為者と観察者の差(actor-observer difference)

# Abstract

- 行為と意図とは必ずしも対応(aligned)しない。人はしばしば満たせなかった善意を抱いている。本研究は、個人が望ましい特性を持っているかを判断する際に、行為者と観察者では意図への重み付けが異なることを示している。実験参加者たちは自分の善意は認めしたが、他人の善意は認めようとしなかった(研究1, 2)これにより、自己が他者よりも好意的に評価された(研究3~5)。考察部分ではこの行為者と観察者の違いの動機的、情報処理的な源が何かに着目し、日常生活における判断と意思決定においてこの傾向が及ぼす影響にも注目する。

- 行為は言葉よりも雄弁に語る？
  - 行為だけでは不十分。裏の意図を読み取る必要
  - 読み取りすぎる傾向＝帰属理論(Jones & Davis, 1965)
  - 行為者は自分の意図に関する情報を観察者よりも多く持っている(Jones & Nisbett, 1971)
    - 満たされなかった可能性を考慮したり、有能さがはっきりとした成果につながらなかった場合の言い訳をできるのは自分に対してだけ(James, 1890)
  - ⇒自分の特性や行為を評価する時には他者の評価と比べて意図を考慮する
    - 困っている人を助けたいと思った, 感謝状を送ろうと思った, 統計がわからない学生に手を差し伸べようと思った etc...

# 意図が自己の評価で考慮されるのはなぜ？

- 自分自身のもつ意図へのアクセシビリティの高さ (Jones & Nisbett, 1971)
- 動機的説明(e.g., Alicke, 1985; Brown, 1986, 1990; Campbell, 1986; Dunning, Leuenberger, & Sherman, 1995; Kunda, 1990; Taylor & Brown, 1988)
- 他者の意図が将来行動に反映されるかを疑問視
  - 新年の決意、計画錯誤(Buehler, Griffin, & Ross, 1994; 2002)-自分の将来については過剰な自信を持つが、他人についてはより現実的な予測をたてる
- 他者の意図の強さや誠実さを疑問視
  - 他者の意図は言葉からしか測れず、結果は行動からしか測れない。自分の意図は感じる事が可能

# 自分の評価では意図を考慮し、他者の評価では意図を考慮しないことがもたらす効果

- 自己評価と自己高揚の連合を説明

- 自分自身の未来を予測する能力を過大視(Dunning, Griffin, Milojkovic, & Ross, 1990)
- 締め切りに間に合う可能性を過大視(Buehler et al., 1994, 2002)
- 自分の嗜好や反応の一般性を過大視(Gilovich, 1990; Marks & Miller, 1987; Ross, Green, & House, 1977)
- 自分には他人より多くのいいこと、他人より少ない悪いことが起きると予測(Klein, 1999; Klein & Weinstein, 1997; Weinstein, 1980)
- 自分は他者よりも好ましい特性や能力を持っていると評定(Alick, 1985; Dunning, Meyerowitz, & Holzberg, 1989; Kruger & Dunning, 1999; Larwood, 1978; Messick, Bloom, Boldizar, & Samuelson, 1985; although see Heine & Lehman, 1997; Weinstein, 1980)

# 本研究の意義

- 自己評価におけるバイアスの理解を促進
  - 行為者と観察者の意図へのアクセスの違い(S. M. Anderson, 1984; S. M. Anderson & Ross, 1984; Jones & Davis, 1965; Jones & Nisbett, 1971; Malle & Knobe, 1997, 2001; Pronin, Gilovich, & Ross, in press)
  - 自己評価における様々なバイアス研究(Alicke, 1985; Brown, 1990; Buehler et al., 1994, 2002; Dunning et al., 1989; Ross et al., 1977; Taylor & Brown, 1988)とのつながりを示すことが本研究で可能
  - 平均点以上効果を使った検討
    - 自己と他者の意図への信用性の非対称性が自己よりも他者を肯定的に評価することにつながっていることを示す
    - 研究1, 2で特徴評価の際に他者と比べて自己では意図が考慮されることを示し、研究3, 4, 5で特性と能力評価における意図の重み付けの違いが意味する者を検討

# STUDY 1

## 概要

参加者たちは自分または知り合いの特性を反映すると思われる側面について記述し、各側面が特性を反映する程度を答えた。半数の参加者は明らかに観察可能な行為について書くよう教示され(意図なし条件)、残りの参加者にはそのような教示は与えられなかった。

## 仮説

- 意図を考慮できない意図なし条件の参加者は、記述はそれほど特性を反映していないと答えるだろう。
- この傾向は他者に関してよりも自己に関してのほうがはっきりと見られるだろう。

# 方法

- 参加者:100名のCornell大学生(男27女73影響なし)
- 手続き
  - 2(ターゲット:自己/他者)×2(意図:なし/統制)
  - 被験者間計画
  - fair, considerate, cooperative, generousを反映する側面(行動)を各5つ記述
  - 記述がどのくらい各特性を反映しているかを7件法で回答
  - 他者記述条件では親友について書くことは避けてもらう
    - 親友と自分との境界線はただの知り合いよりも薄い(Aron & Aron, 2001)



# 結果と考察

- 全特性分の記述が特性を反映している程度を平均
- 指標に対してターゲット×意図のANOVA
  - 交互作用が有意( $F(1,96)=3.87, p<.05, \eta^2=.04$ )。主効果はどちらも有意差なし
  - 自分自身の評価: 統制の記述の方が意図なしの記述より特性を反映していると答える ( $t(50)=2.38, p<.03, \eta^2=.10$ )
  - 他者の評価: 記述の制約の影響なし。意図なしの記述の方が特性を反映しているとやや答えがちだが、有意差はなし
- 意図は他者表象より自己表象で必須
  - 他者の協調性は行動から判断可能だが、自分の協調性は意図を考慮しないときちんと判断できない

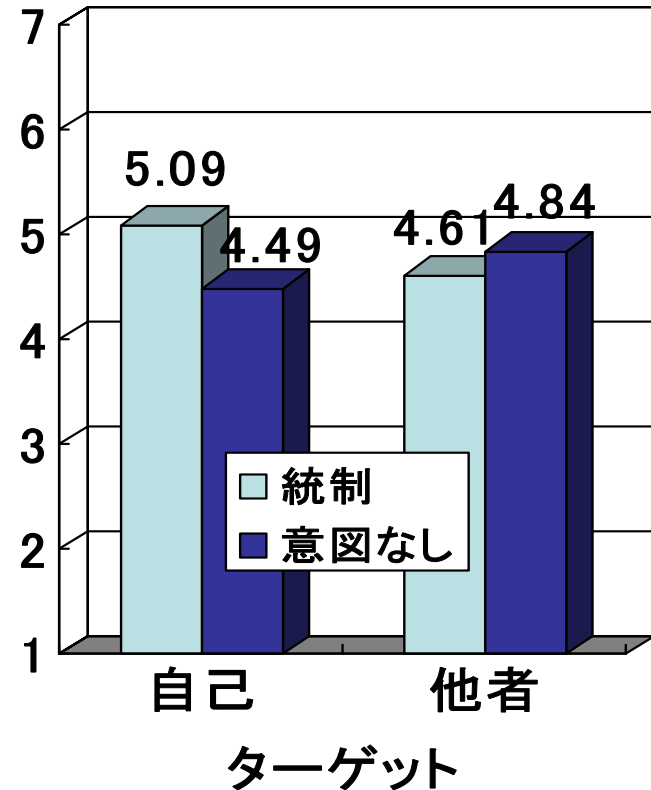


図1

# STUDY 2

## 概要

行為者と観察者の意図への重み付けの違いをよりダイレクトに検討。参加者はリストアップされた特性のそれぞれについて意図を考慮しなくてはいけない程度を評定。半数は知り合いについて答え、残りは自分自身について答えた。

## 仮説

自分について答えた参加者は、他者について答えた参加者に比べて、各特性が自分に備わっているかを評価するためには意図を考慮しないと答え、残りは自分自身について答えた。

# 方法

- 参加者:70名のCornell大学生(男17女53)
- 手続き: Anderson(1968)から選んだ40の望ましい特性のそれぞれについて、【自分/他者】がその特性を持っていると判断するためにどのくらい意図が考慮されるべきかを7件法で回答
  - 半数(37名)は自分について、残りは親友ではない知り合い(忘れないためにイニシャルを記入)について

# 結果と考察

- 参加者レベルの仮説検討
  - 全特性の評定を平均し、two-sampleのt検定
  - $t(68)=4.41, p<.001, \eta^2=.22$  自分(5.11) vs. 他者(4.49)
- 特性レベルの検討
  - 特性別に対応のあるt検定 ( $t(39)=6.25, p<.001, \eta^2=.55$ )
- 全特性の90%(36個)で意図の重みが自己>他者(差の平均0.37)
  - 参加者別の分析で有意傾向( $t(68)=1.71, p=.092, \eta^2=.04$ )
  - 特性別の分析で有意差( $t(39)=6.41, p<.001, \eta^2=.51$ )
- 差は有意だが、二つの評定には高い相関( $r(38)=.91, p<.001$ )
- 両条件を合計した上での各特性のintentionalityの高さと平均以上効果(自分の評価－他者の評価)の相関  $r=.69, p<.001$   
⇒平均点以上効果の一部は意図の考慮の非対称性が原因であることを示唆

# STUDY 3

## 問題

研究2の結果は意図への重み付けが高い特性ほど平均点以上効果が現れやすいことを示した。しかし、参加者が評価対象として自分より劣る他者を選んでいった可能性や、各特性のその他の特徴が影響している可能性がある。

## 概要

参加者たちは研究2と同じ特性について評価した。他者を評価する条件では自分たちのコースにいる典型的な学生を評価した。その特性をもつと判断するために意図の考慮を必要とするかを答えた後、その特性の社会的望ましさ、曖昧さ、観察可能性についても評価した。

## 仮説

特性判断で意図を考慮する必要があるものほど大きい平均点以上効果が見られるだろう。この効果は特性の望ましさ、曖昧さ、観察可能性とは独立に生じるだろう。

# 方法

- 83名のIllinois大学生(男26女57)
- 手続き: 研究2と同じ特性リストを配られ、
  - 自分と平均的な学生を比較
  - 自分がその特性をどれくらいもっているか
  - 平均的學生がどれくらいもっているか
  - 特性をもつか判断するとき意図を考慮すべき程度特性の望ましさ、曖昧さ、観察可能性

【すべて7件法】

# 結果

- 研究2と同様に平均以上効果が見られた
  - 評価と中点(4)の比較  $t(39)=10.47, p<.001$
  - 自己(M=5.43)と中点(4)の比較  $t(39)=6.55, p<.001$
  - 他者(M=4.94)と中点(4)の比較  $t(39)=6.41, p<.001, \eta^2=.52$
  - 参加者レベルの中点(4)との比較  $t(82)=10.09, p<.001$
  - 自己と他者の比較  $t(82)=6.61, p<.001, \eta^2=.35$

相関	r	曖昧さ統制	望ましさ統制	観察可能性統制	すべて統制
直接比較	.76**	.76**	.65**	.76**	.64**
間接比較	.67**	.65**	.60**	.69**	.63**
自己評価	.62**	.41**	.41**	.63**	.42**
他者評価	.15	.13	-.29†	.14	-.30*

† $p<.1, *p<.05, **p<.01.$

- 特性の判断に意図の有無が使われているほど、平均以上効果
- 最も意図の有無が使われる特性considerateが最も大きい平均以上効果
- 回帰分析でも意図が最も大きい説明変数
- 意図と自己評価は相関するが、他者評価は相関せず(または負)

# 参加者ごとの分析と考察

- 各特性判断における意図を考慮することの重要性と諸測度との相関(zに変換後null of zeroと比較)

相関	r	曖昧さ統制	望ましさ統制	観察可能性統制
直接比較	.26**	.23**	.24**	.20**
間接比較	.21**	.17**	.20**	.20**
自己評定	.29**	.23**	.29**	.28**
他者評定		.04~.08		

\*\*p<.01.

- 意図の重要性が高い特性ほど大きな平均以上効果を示した。
- この傾向は各特性に見られ、他の要因を統制しても結果は変わらなかった
- 研究4では意図の考慮の有無を操作して検討



# STUDY 4

## 概要

参加者は研究2や研究3と同じ特性リストを配られ、半数は自分について、半数は知り合いについて答えた。半数の参加者は目に見える行動に基づいて判断し、意図や計画などは考慮しないように伝えられた

## 仮説

意図を考慮しないように言われた参加者のほうが、言われなかった参加者よりも、各特性が自分に当てはまらないと答えるだろう。

# 方法・結果・考察

- 参加者:100名のCornell大学生(男30女70)
- 2(ターゲット:自己/他者)×2(意図:なし/あり) 被験者間
- 40個の特性について自分/他者の当てはまりのよさ、平均的学生との比較を行う(それぞれ7件法)。半数には意図を考慮しないで行動から判断するように教示
- 特性の  
当てはまり  
自己  $t(39)=-3.87, p<.001$  意図なし(5.13)<あり(5.33)  
他者  $t(39)=5.57, p<.001$  意図なし(4.48)>あり(4.18)
- 直接比較  
自己  $t(39)=-3.65, p<.001$  意図なし(4.74)<あり(4.91)  
他者  $t(39)=5.06, p<.001$  意図なし(4.45)>あり(4.18)
- 特性別の分析や他の要因を統制した結果はほぼ同じ
- 意図の考慮の制限は自己(他者)の特性の当てはまりを下げた(あげた)
- 研究3の知見の因果関係が確認された。要求特性の可能性排除
- 意図を考慮しないことで他者の特性の当てはまりが上がったのはなぜ?
  - 制限がない場合には他者の清潔さ、良心、優しさへの疑念が評価を下げていた?

# STUDY 5

## 問題

- 自己と他者で利他的な意図の有無が評価に影響するかを検討
- 私たちは自分が意図した程度まで援助行為をとることはまずなく、だいたい不十分で終わらせてしまう。
- これまでの結果を考慮すると、自己の利他的な意図の実現失敗は他者からよりネガティブに評価される。
- 実際、これまでの研究でgenerous, considerate, sympatheticといった特性で意図の有無が重視され、平均以上効果がでている。

## 概要

参加者は募金のために冷たい水に手をつけるというつらい課題を行った後、(a)自分の行為(b)研究中の自分の愛他心(c)自分の利他的な意志を答えた。yokedされた別の参加者がこれをビデオで見た後、おなじ項目に答えた。

## 仮説

自分自身の愛他心は課題の出来ではなく、  
自分自身の利他的な意図にマッチするだろう。

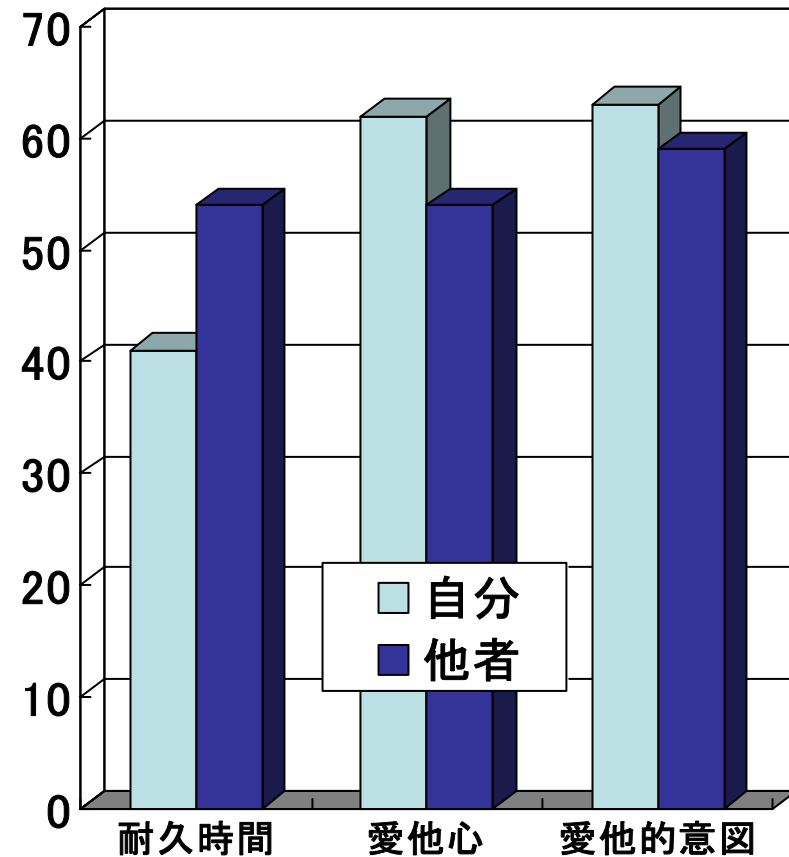
他者の愛他心は課題の出来に基づいて  
評価されるだろう。

# 方法

- 参加者: 54名のCornell大の女子大生(痛みへの耐性を統制 Hellstrom & Lundberg, 2000)が講義の追加点と自分の最も好きな慈善団体への50¢ ~ 5\$の募金と交換に実験参加
- 手続き: “慈善行動の研究”
- Cold-pressor: 同意書にサインをした後、募金する対象団体を決定し、自分がどのくらい水に手をつけていられるかを予測した。1分毎に50¢もらえること、いつでも自ら手を出してよく、追加点は必ずもらえること、ビデオ録画されることが知らされた。課題後、自分のパフォーマンスを他の参加者と比べた。(a)水の中に手を入れていた時間(b)研究中の愛他心(c)自分の利他的な意図。各0(人より少ない)~100(人より多い)
- yoked: 同意書にサイン後、他の人が手を水に浸しているところをビデオで見た後、同じ従属測度に答える
  - 一つのビデオを二人の参加者が鑑賞。一人は前もって手を水に浸してから(empathic)ビデオを鑑賞。結果に違いは見られなかったので平均

# 結果

- 従属測度すべてに対して2(自分/観察者) × 3(時間/愛他心/愛他的意図)のANOVA
  - 交互作用が有意 ( $F(1,15)=11.50, p<.001, \eta^2=.61$ )
  - 自分: 耐久時間 < 愛他心  
( $t(16)=3.49, p<.01, \eta^2=.43$ )
  - しかし、愛他心 = 愛他的意図 ( $t<1$ )
  - 他者: 耐久時間 = 愛他心
  - しかし、耐久時間 < 愛他的意図  
( $t(16)=2.38, p<.05, \eta^2=.26$ )(愛他心に自他間での有意な差はなかった。外れ値を除外すると差が出た。)



# 結果その2と考察

- 重回帰分析による検討
  - 耐久時間 + 利他的な意図 ⇒ 愛他心 を検討
  - 自分自身の場合、利他的な意図(.85)が耐久時間(-.13)よりも多くの愛他心の分散を説明
  - 観察者の場合、耐久時間(.59)の方が利他的な意図(.09)よりも多くの愛他心の分散を説明
- 行為者は援助が必要な場面での自分の助けようとする意図を参考に愛他心を評価
- 観察者は意図を参考とせず、行動だけから評価
- 他者は何をしたかで判断し、自分は何をしようとしていたかで判断する

# 全体考察

- 意図と行為が一致しないことは良くあることだが、その際行為者と観察者とは意図に与える重み付けが異なることを本研究は示している。
- 自分の善意は考慮できるが、他者の善意は考慮しにくい (study 1, 2)
- 善意を考慮できないことが異なる基準を用いた判断につながり、他者よりも自己を好意的に評価しやすくなる (study 3,4,5)
- 自己と他者との意図への重み付けが自己高揚の一因となっていることを示したのは本研究がはじめて



# 人は自分自身の意図を認めるべきか？

- この傾向は不当なバイアスを生み出しているのか？
- considerateの辞書的な意味：他者や他者の気持ちに関心を持ったり見せたりすること
- ⇒意図が実現するかは問題外⇒正当化できる場合もあり
- ただし、自分の意図は考慮できても他者の意図は考慮しにくいことを本研究は示している
- 人は自分が実際にした健康的な行動ではなく、しようと思っている健康的な行動にもとづいて、自分は健康的な問題をかかえないと予測する(Kruger, Gilovich, & Staggs, 2003)
- 意図だけでconsiderateにはなれても、健康にはなれない

# 他者の判断バイアスにおける意図の役割

## • 判断バイアスとの関係

- 計画錯誤は他者の予測で生じない(Buehler et al., 1994, 2002)
  - 自己の予測ではどのように課題を終わらせようと意図しているかを考慮するが、他者の予測では意図を考慮しないため、より正確な予測が可能
- 意図への重み付けの歪みは社会的な不和の原因
  - 自分の失敗は意図を考慮して許すが、他者の失敗は許せない
- からかい研究
  - からかう方は悪意がなく面白いものと認識、からかわれた方はもっと悪意に満ちたものと認識(Kowalski, 2000; Kruger, Gordan, & Kuban, 2003)
  - からかいはその人が好かれていることを示す意図に満ちたもの(Keltner, Young, Heerey, Oemig, & Monarch, 1998)だが、この意図はからかわれた方には伝わっていない(Kruger, et al., 2003)
- よくない行為における悪意にも行為者と観察者で歪みがある
  - 行為者は自分の意図にしがみつくが、観察者は行為だけから判断
  - 悲劇的な結果をもたらした場合には、行為者が自分の意図(そんなつもりでなかった)を観察者以上に軽視する場合もある

- 人はなぜ自分に関して“the best of intentions”を認めてしまうのか？
  - このバイアスの原因は動機的？認知的？
    - 認知的: 相手の意図を知ることができない
    - 動機的: 自尊心をあげるために...
  - どちらもあって、組み合わせあって作用しているだろう
    - 研究5で、観察者は行為者の善意をみとめてはいたが、観察者の全体的な愛他心を答えるときに、それは考慮されていなかった  
= 動機的説明に一致
    - 自分の意図より他人の意図について考えるほうが時間がかかる  
= 認定的説明に一致 (unpublished manuscript)
  - どちらが原因だとしても、結果は同じだろう
    - 地獄への道は善意で敷き詰められている (諺)
    - 自己高揚への道も善意で敷き詰められているのだろう